

自ら思考するピアノ表現学習における学生の意識の変容

—イメージ描画からのアプローチを例に—

加藤 晴子・伊達 優子*

A Change of Consciousness of Students by Piano Expression Learning to Consider by Oneself —A case Study of Image Drawing—

Haruko KATO ・ Yuko DATE

*就実短期大学

Abstract

Various music ability is needed by a childminder to promote music activity of a child. In various music ability, a piano skill gives music activity of a child big influence. A student aiming at a childminder must do an experience to think about music expression to children. In this study, image drawing learning was tried to raise music articulatory of a student. It was analyzed about transformation of consciousness of a student for the music expression that occurred by learning. As a result of analysis, the effectiveness of learning was clarified about the following points; the will that one wants to convey, objective realization of an exercise, realization of independent expression, awareness about music ability for as a childminder.

Key words

music expression, image, piano expression learning, childminder, painting

1. はじめに

保育者¹⁾には、子どもの音楽的な表現活動を助長するための様々な音楽的能力が求められる。そこでは、音楽を表現するための技能と音楽を感じ取る力、いわゆる音楽的感覚の双方の充実が必須である。とりわけ、子どもたちの音楽活動の場では、保育者の音楽的表現力は子どもの音楽的活動を活性化させ、活動の質を高める上で大きな役割を果たすものである。同時に、子どもたちの表現活動の内容や質を吟味し、その時々の子どもの発達の状態、興味や関心を的確に把握することが保育者に求められる。したがって、保育者養成課程においては、学生にこのような資質をいかに獲得、伸張させるかが課題である。

様々な音楽的スキルの中でも、ピアノの実技能力は子どもたちの音楽活動に大きな影響を与えるものである。そこで、保育者養成課程におけるピアノ実技指導に焦点をあててみよう。表現活動の援助者としての保育者という立場からみるならば、学生が実際に保育者として実践に当たる前に、どのように音楽を表現すれば子どもたちに伝わるのか、この音楽で何を子どもたちに伝えるのか等について体験的に学んでおくことが欠かせない。したがって学習では、それらをピアノと

※ E-mail hkato@ha.shotoku.ac.jp

いう表現手段を通して学生自身に模索させることが必要であると考え。その上で、子どもの表現に共感できる眼差しと的確な判断力、また、自らがよき表現者として存在するための音楽的な素地を培っていくことが学習として有用であると考え。一方、学生の入学時における音楽的知識やピアノ演奏技能は、それまでの経験の有無や期間の長短によって実に様々である。どのようなレベルの学生にも自らの力で表現内容を考えていける道筋を提示し、自分自身が良き表現者であるべきであるという自覚と、その必要性を認識させていくような授業が必要ではないだろうか。

そこで本研究では、学生の音楽表現力を高める方法の一つとしてイメージ描画学習を試みた。学習を、2005年度後期から2006年度前期の間に全3回行い、対象者は全て同じ学生である。学習によって生じる音楽表現に対する意識の変容をもとに学習の有効性について検証したい。なお、学生は以下の手順で学習を体験した。

- ①導入…音楽に対する“表現したい自分のイメージ”を具現化する。
- ②展開…ピアノ曲聴取時において自分が感じたイメージを描いてみる。
- ③まとめ…①②の経験をもとに、自分のピアノ演奏表現について、自らの力で思考する。

2. ピアノ曲聴取時におけるイメージ描画学習に対する学生の意識

まず、イメージ描画学習に対する学生の意識について述べたい。イメージ描画学習の対象学生、授業形態、学習方法は以下の通りである。

- ・対象学生：就実短期大学幼児教育学科第1学年学生（女子9名）
- ・学習時期：2005年後期
- ・授業形態：グループ学習
- ・授業者：伊達優子
- ・学習方法：①他学生が演奏するピアノ曲を聴取し、自分が感じた印象をイメージ画で表す。なお、演奏者は曲名やイメージを、演奏前には他学生に知らせない。
- ②合評を行い、表現に対する意識や考え、その多様性などについて学生相互で深めていく。

学生の意識については、授業後に配布したアンケート用紙に自由記述で回答された内容を資料として考察を行う。

設問は“イメージ描画学習や学習後の自分の意識の変化、あるいは曲に対するイメージについて自由に記述しなさい”というものである。表1に、イメージ描画学習について記述されていた内容を整理して示す。

表1 イメージ描画学習に対する学生の意識

視 点	学生の記述例		人数
学習について	イメージ描画学習は、とても意味があった。		9
イメージ	伝達	・同じ曲に対して、人それぞれのイメージがあり、幾通りにも感じられる。	9
		・自分のイメージが他人に伝わる喜びを感じた。	6
		・自分が伝えなかったイメージと違うイメージがあると、どうしたら伝わるかを考えていきたい。	3
	多様性	・自分と違うイメージがあると、より深く考え、関心が持てる。	9
重要性	・自分自身が表現する音楽に、的確なイメージを持つことの重要性・大切さが分かった。	6	
興味・関心	・音楽に対する視野や、新しい世界が広がった。		3
感動	・音楽で物語ができることに感動した。		1
困難	・自分の思っていることを音楽で伝えることの困難さを実感した。		2

表1から、学生が作品に対してイメージを持つことに対して積極的に考え、音楽の持つ多様性や奥深さを感じていることがわかる。また、表現の多様性を知ることによって、表現することに対してさらに関心を持ち、表現の意欲が一層高まった学生もみられる。学生は、イメージしたものを絵に描いてみる活動を通して、「イメージが伝わったことの喜び」と同時に、「作品に対して自分の“伝えたいイメージ”を明確に持つこと」の重要性を学ぶことができたと考えられる。以下に、学生が描いたイメージ画を例示する。



曲名：『美しき青きドナウ』
(ピアノ編曲) J. シュトラウス



曲名：『ラデツキー行進曲』
(ピアノ編曲) J. シュトラウス

3. 自己思考によるピアノ表現学習における学生の意識の変容

3-1 作品の音楽的特徴および演奏の工夫、表現に対する思考の変化

ここでは、学生がイメージ描画を体験したことによって、体験以前と比べて作品の特徴に対する思考がどのように変化したか、また、演奏の工夫や表現に対する思考がどのように変化したのかをみていきたい。対象学生、授業形態、学習方法は以下の通りである。

- ・対象学生：就実短期大学幼児教育学科第2学年学生（女子9名）
- ・学習時期：2006年前期
- ・授業形態：個人レッスン
- ・授業者：伊達優子
- ・学習曲：各学生の進度に合わせた一人ひとり異なる曲
- ・学習方法：①学習曲に対する、場面の变化毎のイメージを考えさせる。
②場面が変化する毎に感じられる音楽の特徴を探求させる。
③イメージどおりの演奏の実現に向け、音楽的な特徴に対する演奏の工夫を模索させる。

学生の意識変化については、学生が自ら楽譜上に書き込んだ記述、および授業者がレッスンでの学生の発言・気づきを楽譜に書き込んだ記述を取り上げ、それらを分類し、考察を行う。記述内容を整理し、音楽的な特徴についての思考の変化と、演奏の工夫・表現についての思考の変化を、それぞれ、表2と表3に示す。

表2 学習による音楽的な特徴に対する思考の変化

意識したこと	具体的な視点	意識した人数	
		学習開始前	学習終了時
曲のイメージ		9	9
感じ・雰囲気	軽い、激しい、等	9	9
場面の变化		9	9
表現の要素	強弱	6	9
	速度	1	5
	メロディの意識	1	8
	構成	0	9
	リズム変化	0	7
	響き	0	4
	拍子感	0	1
	休符	0	3
奏法	レガート、アクセント等	4	8
	伴奏型の変化	0	4

表3 演奏の工夫・表現に対する思考の変容

意識したこと	具体的な視点	意識した人数	
		学習開始前	学習終了時
曲のイメージ		9	9
感じ・雰囲気	軽い, 激しい, 等	9	9
場面の变化		9	9
表現の要素	強弱	9	9
	速度	1	6
	構成	0	9
	メロディ (方向性)	0	5
	フレーズ感	0	4
	音色	4	9
	ペダル	5	9
	休符	0	3
	拍子感	0	1
奏法	レガート, アクセント等	8	9
演奏技能	跳躍時の確実性, 指の素早い動き, 等	5	9
	身体の使い方	0	2
	集中力	2	7
演奏効果	意識	0	7

表2から、曲に対するイメージ、場面の变化、曲の感じ（曲想）に関しては、どの学生も積極的に考え、対応できていたことがわかる。また、学習開始時には強弱を基本とした視点が多くみられたのに対し、学習を重ねることで、音色、ペダルの工夫、奏法（アーティキュレーション）等について思考するようになったことがわかる。

表3から、イメージを実現するためには、技術的な課題の克服、より効果的な演奏の工夫、メロディーの方向性、自分の気持ちの持ち方などへの意識の必要性等に学生自身が気付くようになったことがわかる。ここから、学生の表現に対する意識の向上や、より深い表現を求める学生の姿勢がみられる。その一方で、表現として求められる休符の意識やその重要性、拍子感、演奏時の身体の使い方等に関しては、思考が十分に深まったとは言い難い。

次に、学生が学習した作品について譜例を挙げ、学生が捉えた作品のイメージ、音楽的特徴、表現の工夫を例示する。なお、イメージや音楽的な特徴、演奏の工夫・表現などに対する記述は、すべて、学生自身の楽譜への記述およびレッスンでの学生の発言や気付きを授業者が楽譜に書き込んだ記述の原文のままである。学習曲は、シューベルトの「セレナーデ」（ピアノ用編曲譜）である。

譜例 1

Moderato

Dm B \flat Gm6 A

pp

イメージ……極寒の地，女の子がとほとほと歩いている。

音楽的な特徴……前奏が *pp* で始まる。右手のメゾ・スタッカート。左手低音でのオクターブ。

演奏の工夫・表現……*pp* だからこそ深い音で。メゾ・スタッカートはとほとほと歩くように表現する

譜例 2

Dm Gm6/B \flat A7 Dm A7

イメージ……女の子は悲しみにくれている。

音楽的な特徴……左手の 8 分音符と右手の三連符。同じメロディーが 1 オクターブ上で重音で繰り返される。

演奏の工夫・表現……8 分音符と三連符を自然に弾く。悲しみの音色で表現する。

譜例 3

A7 Dm B \flat F

イメージ……それでも歩いていこうとするが，突風が吹き荒れる。

演奏の工夫・表現……意志を強く持つ音で。

譜例 4

A7 D G D

イメージ……ふと前を見ると，家の中の暖かそうな暖炉が見える。

音楽的な特徴……明るい響きが続く。

演奏の工夫・表現……温かい暖炉の炎のような、暖か味のある広い感じの音色で。

譜例 5

Musical score for Example 5. The score is in G minor (one flat) and 4/4 time. It consists of two staves: piano (top) and bass (bottom). The piano part starts with a *mf* dynamic and features chords Gm, D, A7, and D. The bass part provides a steady accompaniment. The score ends with a *pp* dynamic marking.

イメージ……暖かそうな暖炉は幻覚だった。

音楽的な特徴……場面始まりが、Gm (コード) の暗い響きが *mf* で始まる。 *pp* へ向かう。

演奏の工夫・表現……暗い響きを大切に、悲しみを思い出すような音色で弾く。

譜例 6

Musical score for Example 6. The score is in G minor (one flat) and 4/4 time. It consists of two staves: piano (top) and bass (bottom). The piano part starts with a *mf* dynamic and features chords Dm, Gm/Bb, A7, and Dm. The bass part provides a steady accompaniment. The score includes markings for L.H. (Left Hand) and R.H. (Right Hand) and features triplets in both hands.

イメージ……また少女は、一人で歩き続ける。

音楽的な特徴……曲の最初のメロディーが1オクターブ下に移り、右手で演奏する (左手と交差する)。

演奏の工夫・表現……低い位置に移ったメロディーを、深い音で響かせる。手の交差があり、技術的に難しいので気持の集中が途切れないようにする。

譜例 7

Musical score for Example 7. The score is in G minor (one flat) and 4/4 time. It consists of two staves: piano (top) and bass (bottom). The piano part starts with a *mf* dynamic and features chords A7, D, G, and D. The bass part provides a steady accompaniment. The score includes markings for L.H. (Left Hand) and R.H. (Right Hand) and features triplets in both hands.

イメージ……少し雲の切れ間から、太陽が少女を照らし出す。

音楽的な特徴……明るくなっていき、この曲で一番高い音が出てくる。

演奏の工夫・表現……明るくなっていく感じを、一番高い音に向かって段々と。

譜例 8

Musical score for Example 8. The score is in G major and 4/4 time. The left hand plays a steady eighth-note accompaniment. The right hand plays a melody. Chords are indicated above the staff: A7, Bdim, A7, Bdim, A7, Bdim, A7. Dynamics include *cresc.* and *f*.

イメージ……冷たい風が吹き荒れる。

音楽的な特徴……左手の16分音符。*cresc.*から*f*へ。

演奏の工夫・表現……16分音符を前に進ませ、激しい風の様子を出す。右手のメロディーは力強く。

譜例 9

Musical score for Example 9. The score is in G major and 4/4 time. The left hand plays a steady eighth-note accompaniment. The right hand plays a melody. Chords are indicated above the staff: Dm, Gm6, A7, D, Gm. Dynamics include *dim.* and *pp*.

イメージ……そして、また、少女の旅は続く。歩き続ける少女の後ろ姿…。

音楽的な特徴……付点2分音符が多く使われている。*dim.*から*pp*へ。最後の音は*pp*の付点2分音符にフェルマータがある。

演奏の工夫・表現……遠くに行くような音色を出す。*rit.*で。付点2分音符を大切に弾く。

以上から、学生は自分がイメージしたことを作品の旋律やリズム等と関連づけて捉えようとしていることがわかる。言い換えれば、学生は、自分がイメージしたことや感じたことが作品のどのような要素、あるいはどのような特徴によるものなのかを考え、それを表現に繋げようとしているのである。そこでは学生は、発想記号の一つひとつの意味についても、表現との関わりから捉えようとしている。

3—2 音楽を聴くことに対する意識の変化

次に、音楽を聴くことに対する学生の意識の変化についてみていきたい。対象学生、授業形態、学習方法等は以下の通りである。

- ・対象学生：就実短期大学幼児教育学科第2学年学生（女子9名）
- ・学習時期：2006年前期
- ・使用曲：自己思考によるピアノ演奏表現学習で使用した各人それぞれの学習曲

- ・ 授業形態：グループ学習
- ・ 授業者：伊達優子
- ・ 授業方法：①各人の学習曲の題名とそのイメージを他学生に伝える。
②学習曲を他学生の前で演奏発表する。
③イメージと合致した演奏であったかを学生相互で合評を行う。

音楽を聴くことに対する意識の変化を捉えるために、学習後に行った合評会での授業記録から学生の発言を取り上げて分類し、考察を行う。合評会における学生の発言内容は大きく4つに整理される。それらを表4に示す。なお、表4には学生の発言を原文のまま記載する。

表4 学生の発言内容

分類	着眼点	記述例
イメージ	イメージとの合致	<ul style="list-style-type: none"> ・ 迫力のある音色を感じた。 ・ イメージによる音色の違いがはっきり出ている。 ・ 本当に悲しそうな音色が悲しくて、聴いている私も本当に悲しかった。
	成長	<ul style="list-style-type: none"> ・ イメージする想像力がとてもついている。
技術力	イメージと指の動き	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しい場面で指の動きがよく表していた。 ・ 指の動きの色々な表情が、曲想に合っている指だった。
	感動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 十六分音符の指の動きが素晴らしい。 ・ ペダルの技術が素晴らしい。 ・ すばやい動きや、跳躍しても音はずさないことに魅了された。
	成長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指の動きや、はっきりした音の出し方が上達したと思った。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 三連符が一つ一つははっきり出ているが、音が揃っていない。 ・ 和音の音が外れたのが惜しい。 ・ 弾きなおすと音ミスが目立ってしまった。 ・ ペダルの音が濁ってしまっていた。
演奏効果	効果的な表現	<ul style="list-style-type: none"> ・ メリハリがあった。 ・ 出始めから美しく、曲に入り込めて聴けた。 ・ はじめの音の出し加減がとてもよかった。 ・ 悲しい曲想を、とても良く感じて弾いているのが分かった。 ・ 音楽の流れと感情のこもり方が良く分かった。 ・ 明るい場面は、弾いている本人もリズムにのって、明るい表情で弾いていた。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 元気な感じが目立ち表情に乏しい。 ・ イメージした場面の激しさが不足しているので、それが強調されていない。 ・ 全体的な音の大きさに対して、<i>p</i>の効果が少ない。 ・ 終わったかどうかあまりはっきりしていない、弾いている人の理解が足りないと感じた。 ・ 終わり方でイメージと弾き方が迷っている感じがしたので、工夫が欲しい。 ・ 緊張しているのがとても伝わって来てしまった。
その他		<ul style="list-style-type: none"> ・ 以前より音そのものが美しくなっていた。 ・ 普段の○○さんとは違う一面の音楽表現で、人間の幅が広がっているようで感動した。

表4から、学生が、イメージしたものと表現したものが演奏者だけでなく、聞き手にとって合致したものであったかを視点として、表現を客観的に捉えようとしていたことがわかる。イメージしたものが聞き手に伝わるためにはどのようにすれば良いかについて、様々な角度から意見が述べられており、学生は、表現を高めるためには演奏技術が伴うことが必要であることを体験的に感じ取ったといえる。

3-3 保育者の専門性としての音楽的能力の必要性に対する自覚

ここでは、学生が保育者の専門性としての音楽的能力をどのように自覚しているのかについてみていきたい。ピアノ演奏表現学習後に行ったアンケート調査の記述をもとに考察する。保育者に必要とされる音楽的能力に関する記述内容は、大きく3つに分類できる。表5にその内容を示す。なお、学生の記述については原文のままを記載する。

表5 学生が感じた保育者の専門性としての音楽的能力

必要な力	視点	記述例
音楽表現		<ul style="list-style-type: none"> ・自分のピアノに感情が無いと、子ども達には何も伝わらない。 ・子ども達の表現の深さや気持ちに合わせられるかどうかは、自分の表現しだい。 ・その曲のイメージにあった表現を自分がすることで、子ども達のイメージが広がり、成長に役立つと思う。 ・イメージを考えることで、例えば、童謡の伴奏の仕方とも考えなくてはならない。
教材	選定	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの表現、子どものイメージに合う曲を探す能力が必要だと思った。 ・リズムや拍子や曲調など、色々な種類の音楽の中から、その場面に最もよく合う曲を考えることができるようにならなければ、と感じた。
	解釈	<ul style="list-style-type: none"> ・ただ単に、“楽しく歌う”だけではなく、イメージすることで、“何をこの曲で伝えたいか”という意識を持つことが大切だと実感した。 ・“なぜこの場面でこの曲を使うのか”という目的や、曲の内容の理解をしっかりと持っていないと、子ども達に伝わらない。
	応用・展開	<ul style="list-style-type: none"> ・一つの曲に対してでも、沢山のイメージが出来るようになったので、子どものイメージに合わせた活用が必要だと思う。 ・どういう保育場面で用いるかは、自分の曲へのイメージから考えることが可能だと知った。 ・指導のスムーズな進行には、自分の取り入れたい曲と自分のイメージの一致が必要。
子どもの表現の理解		<ul style="list-style-type: none"> ・子どものイメージを聞いたり、自分のイメージを話したりすることで、子ども達のイメージする力を促していくことが大切だ。 ・子どもにとっても、イメージして聞いたり歌ったりすることは大切で、それを私達が理解して指導していかななくてはならない。

表5から、学生は、子どもたちの音楽活動を豊かなものにするためには自らの音楽表現の力が不可欠であると感じ取ったことがわかる。また、学生はイメージすることの大切さを知ると同時に、子ども自身のイメージという視点から教材を考え、子どもの表現を受け止めていくこと

の必要性を認識することができたといえる。

3-4 学生の人間的成長

学習後のアンケート記述をもとに、自己と音楽表現について学生がどのように捉えるようになったのかをみていきたい。学生の記述内容は大きく4つに整理できる。それらを表6に示す。なお、学生の記述については原文のままを記載する。

表6から、学生は学習を通して、自己の性格や特徴、あるいはこれまでの学習等と関連させながら音楽表現や表現に必要な要素について考えていくようになったことがわかる。そのような思考の変化は、学生の人間的成長に繋がるものであるといえよう。

表6 学生が自己と音楽表現について捉えた内容

分類	記述例
意欲の高まり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何度も挑戦しているうちに、少しずつでも人に伝わっている実感が持てた。 ・ 色々な曲にチャレンジすることが楽しく、もっと技術力も上げていきたいという意欲が湧いてくる。 ・ 自分の弾いている曲を“人に聴いて欲しい”と思うまでになった。 ・ 自分だけの考えに固執せず、他人の意見も取り入れて、視野を広げていこうと思うようになった。 ・ 弾けば弾くほど弾けなくなる時期もあり焦ったが、“弾けない”とばかり思わずに一生懸命練習した。
性格との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以前はネガティブな一面があり、そういう部分が全部音に出ていた。しかし、苦手な <i>f</i> の音を怖がらず出そうと努力したりすることでピアノも上達し、考えがポジティブになったと実感している。 ・ 私は少し大雑把で、丁寧さに欠けるところがあるが、この学習を通して丁寧にすることが少し身についたと思った。
表現に必要な要素	<ul style="list-style-type: none"> ・ 忍耐力と持久力の大切さを知った。 ・ 人に何かを伝えることは、自分の中で飲み込んでよく消化していないと出来ないものだという事を考えるようになった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皆それぞれ良い所があり、見習いたいと思うところも沢山あり、友達の成長を実感した。同時に自分の成長も感じ、とても嬉しい。

4. まとめ—保育者養成校のピアノ表現におけるイメージ描画学習の有効性—

ここでは、これまで述べてきたことをもとに、本研究で行ったイメージ描画学習の有効性について以下の5つの視点から検討する。

- 1) 音楽そのものへの意識の向上と、「伝えたい意欲」の喚起
- 2) 練習目的の具体化・明確化と曲への愛着
- 3) 主体的音楽表現の実現
- 4) 将来の保育者としての専門的な音楽的能力に対する自覚
- 5) 人間的成長

4-1 音楽そのものへの意識の向上と、「伝えたい意欲」の喚起

学生は本学習を通して、音楽の持つ奥深さや多様性に気づくことができた。また、自分ももったイメージとは異なるイメージと出会うことをきっかけとして、作品についてより深く考えるこ

とができた。そこからは、音楽の視野の広がりも期待される。これらから、学生はイメージ描画学習を通して、自分の表現を実現するためには、より明確なイメージを持つことが大切であることを体験的に学ぶことができるといえる。また、本学習では、イメージが他人に伝わることの喜びと同時に、伝えることの困難さを実感できたため、“自分のイメージ通りに弾きたい”、“自分のイメージを伝えたい”という意欲の高まりに繋げていくことができたといえる。

4-2 練習目的の具体化・明確化と曲への愛着

学生は、自分自身のイメージをもとに、個々の音をもつ意味を考え、表現の意図を自分なりに明確に持つことができた。自分の表現を具現するためには、どのような工夫が必要か、例えば、どんな奏法でイメージ通りの音を引き出すか等を体験的に学ぶことができた。それによって、練習が、やみくもに音やリズムを追うといった無意味な繰り返しではなく、具体的な目的を持った行為へと転換した。

自分自身のイメージをもとに音やリズム等、それぞれの要素の意味づけを行い、そこから表現を導き出す活動では、そのプロセスにある練習自体が学習者自身に意味の深い活動として認識されることが必要である。それは、作品への愛着にも繋がるといえよう。

4-3 主体的音楽表現の実現

本学習では、音楽に対するイメージ形成が、音楽の特徴への気づきや演奏の工夫に深く寄与していることを学生自身が認識できた。一般に、学習の初期の段階では、“表現=強弱”という視点から始まる傾向がみられるように思われる。これに対し、イメージ描画学習では自分のイメージの実現に向けて主体的に取り組むことによって、様々な要素について自発的な気づきや、意識の高まり等がみられた。それは例えば、リズム、響き、伴奏型、アーティキュレーション、技術的な課題の克服、より効果的な演奏の工夫、メロディーの方向性、自分の気持ちの持ち方等である。このような結果をもとに、主体的な音楽表現を実現する道筋を図1に示す。

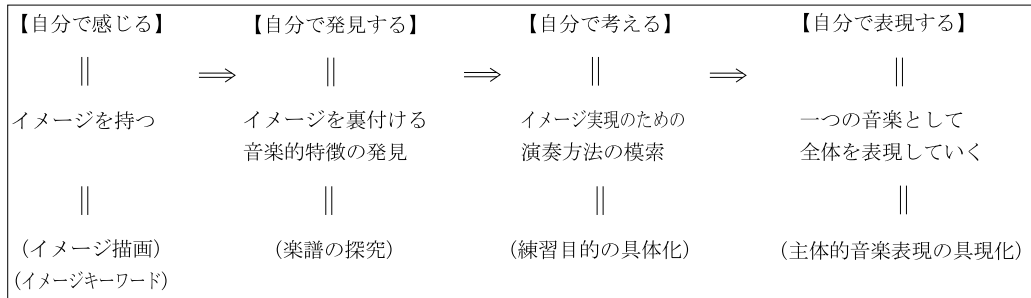


図1 主体的音楽表現実現への道筋

4-4 将来の保育者としての専門的な音楽的能力に対する自覚

学生は、本学習を通して、保育者に求められる音楽的諸能力について考え、その必要性を認識することができた。それは、例えば、自分自身の豊かな音楽表現力はもとより、子どものイメージや表現に合致した曲の応用や活用力（音楽素材応用・展開力）、子どもに“この曲で何を伝えたいか”や曲の内容への高い意識（教材解釈力）、子どもの表現やイメージに合う曲を探す能力（教材曲選定力）、子どものイメージをよく観察し、子どもがイメージする力を育てていく力（幼

児表現理解・共感力)である。このような必要性を認識することが、保育者を目指す学生が学習をしていく上での基盤となるのではないだろうか。

4—5 人間的成長

学生は、学習における演奏発表や合評というグループ学習の場を通して、他者の表現への共感や、成長を喜ぶ気持ち、ともに学びあうことの喜びと、その価値を感じとることができた。一般に、演奏という行為では、不安、葛藤、自分自身に対するもどかしさ等を感じるが多々ある。本学習においても、多くの学生がそれらを体感し、かつ、それらを乗り越えることができた。その過程で自分に不足していたものを発見すると同時に、以前の自分を振り返り、それをこの学習を通して克服しつつあることを実感できたことは、学生個々人の人間的成長に繋がるものであったといえる。

以上から、自ら思考するピアノ表現を目的としたイメージ描画学習は、音楽そのものへの意識の向上と「伝えたい意欲」の喚起、練習目的の具体化・明確化と曲への愛着、主体的音楽表現の実現、将来の保育者としての専門的な音楽的能力に対する自覚、人間的成長という点において、一応の有効性が確認できた。しかし、音楽表現においては、拍子感、休符への意識、フレーズ感、自分の身体の使い方への意識までには至っていない。これらの点については今後の課題としてさらに研究を深めていきたい。

注

1) 幼稚園教諭・保育者の両者を指す。

主要参考文献

- 『現代幼児教育研究シリーズ10 音楽的表現』岸井勇雄，小林龍雄，高城義太郎，栃尾 勲，編，チャイルド本社，2000
『幼稚園教育指導要領解説』文部科学省，フレーベル館，1999
『保育内容 音楽表現 第2版』大畑祥子，健帛社，1999

資料

- 『保育用語辞典 第3版』ミネルヴァ書房，2004
『やさしく弾けるピアノ・ソロ ウェディングクラシック』kmp，2000

